

芦屋大学論叢 第86号

(令和8年7月31日)抜刷

森のようちえん卒園児の学びに向かう力と学習態度

—小学2年生の育ちと要因—

大 谷 彰 子

森のようちえん卒園児の学びに向かう力と学習態度

—小学2年生の育ちと要因—

大谷 彰子

芦屋大学臨床教育学部

1. 目的

幼児期において環境との相互作用は、子どもの発達を促す原動力である。なかでも、保育における自然との関わりの重要性は、幼稚園教育要領や保育所保育指針等にも記されており、北欧を発祥とし、日本国内でも独自の発展を遂げてきた「森のようちえん」に代表される自然保育は、子どもが本来持っている育ちの力を、自然という予測不可能な環境との相互作用によって引き出すという教育的意図を持った実践である。近年は、一部の園が行っているオルタナティブ教育という位置づけから、長野県、鳥取県、広島県、滋賀県、千葉県等の自治体による認証（定）制度へと広がりがみられるなど、公的な教育改革に取り入れられてきている。自然体験活動を保育の中心に据えた森のようちえんの施設数は、2026年2月時点でNPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟に会員登録している団体だけで334団体に達しており、現在は在園児だけでなく、卒園児の小学校低学年から大学生世代までを対象とした追跡調査・比較研究が進められている。

小嶋ら（2017）は、森の幼稚園卒園児小学1～6年までの保護者を対象に、森の幼稚園の保育環境が小学校以降の体力・運動能力および学力に及ぼす長期的な影響の検討を行い、森の幼稚園卒園児の体力・運動能力の成績は高い傾向にあり、森の幼稚園での保育経験が長期的な影響を及ぼしており持続性を持つと述べている。山口ら（2021）は、森のようちえん卒園児2年生の保護者を対象に、幼児期の教育環境の違いが、「レジリエンス」や「自尊感情（自己肯定感）」にどう影響するかを既存園の子どもと比較検証した。その結果、レジリエンスと自尊感情が有意に高く、児童期における主体的・協働的な行動傾向が認められ、ポジティブな自己概念の形成に寄与しているとした。下村ら（2023）は、日本で最も歴史のある森のようちえんの一つ「こどもの森幼稚園（長野県）」を卒園した大学生世代（19～22歳）を対象に、国（内閣府や日本財団）が調査している日本の若者のデータと比較して非認知的特質の傾向を検証している。調査の結果、高い自己肯定感やリーダーシップと参画意識の高さ、卒園児同士の心理的つながりの深さの3つの注目される傾向があったと述べた。酒井ら（2021）は、学童期の「学校生活への積極性」を調査し、幼児期に存分に外遊びを楽しんだ子どもほど、「友だちや先生と積極的に関わる」「学校行事やクラスの活動に活発に参加する」傾向が強く、自分から進んで身体を動かしたいというアクティブな意識が持続しているとした。また、ヘフナー（Häfner, P. 佐藤、2009）は、一般的な幼稚園のように一斉に座っている経験が少ない森の幼稚園の子どもは、小学校の授業に集中できないのではといった保護者の不安に対し、ドイツでの森の幼稚園と既存園を卒園した子どもとを比較し、「読解力・文章や話への理解力」、「社会的行動（ルールを守る、思いやり、対立の解決力）」、「学習に対する忍耐力と集中力」について、有意に教師から高い評価を得ており、森の幼稚園で非認知能力を鍛えた子どもは、就学後にすべての教科の伸び代が大きくなるとした。筆者の森のようちえん卒園児の小学1年の保護者を対象にした、社会情動的スキル、認知スキル、学習態度、学習習慣に関する研究（大谷 2025）では、「社会情動的スキル」と「学習態度」はすべての項目で森のようちえんが高く、自ら学ぼうとする主体性や知的好奇心、学びに向かう意欲が既存園と比較し有意に高かった。一方、学校の宿題をする、翌日の学校の準備をするなどの、大人に指示されること、決められたルーティンをこなすことは苦手であることが明らかになっている。

森のようちえん卒園児の育ちについて、非認知スキルや体力についての研究は増加しているが、学習態度や認知スキルの育ちに着目する研究は未だ少ない。森のようちえんの卒園児の就学後の学びに向かう力（非認知スキル、認知スキル、学習態度、学習習慣）について継続して検証することは、森のようちえんの保育の中期的な意義の検証につながると考える。

本稿は森のようちえん全国ネットワーク連盟の承認を受け、森のようちえんの保護者を対象に 2020 年度からの縦断調査 5 年目の検証である。森のようちえん卒園児（小学 2 年生）の育ちを、既存園の卒園児と比較することで、森のようちえん卒園児の学びに向かう力（非認知スキル、認知スキル、学習態度、学習習慣）の育ちの特性と、その成長要因について明らかにしていくことを目的とする。

（注：本稿では、幼稚園、保育所、自主保育、自然学校等の日常型の乳幼児自然体験活動の総称を、広義の「森のようちえん」と平仮名で表記している。ただし、引用文献については原著の表記を尊重し、「森の幼稚園」と記載している箇所も含む。）

2. 方法

2.1 対象者

全国の日常型森のようちえん 95 園の卒園児（2 年生）の保護者 88 件。

2.2 調査時期

2025 年 2 月～3 月に自記式アンケートと web によるアンケートの QR コードを添付した資料を各森のようちえんに郵送し、園から卒園児（小学 2 年生）の保護者にアンケートの依頼をお願いした。結果は、2025 年 3 月～4 月に回収した。

2.3 分析方法

本研究でのアンケートは、NPO 法人ネイチャーマジック森のようちえんさんぽみち 野澤俊索理事長と協同で作成したものである。質問項目は、ベネッセ教育総合研究所（2016）「幼児期から小学校 1 年生の家庭教育調査 縦断調査」と（2023）「幼児期から中学生の家庭教育調査 縦断調査」から採用し、表現に若干の変更を加えたものに、森のようちえんならではの質問項目を加えて作成した。質問はすべて 4 件法で回答を求めた。比較対象として、前述のベネッセの保護者アンケート（調査地域：日本全国、対象：縦断調査に同意し、年少児から小学校 2 年生までの調査に中断することなく継続して参加した母親、サンプル数：年少 1905、年中 1460、年長 1074、小学 1 年 544 件、小学 2 年 479 件。調査時期：年少児 2012 年、年中児 2013 年、年長児 2014 年、小学 1 年 2015 年、小学 2 年 2016 年）の結果を用いた。以降、森のようちえんの比較対象として「既存園」と記述する。相関分析は IBM SPSS バージョン 29.0 を用い、spearman の相関係数と有意確率（両側）を記載した。

2.4 倫理的配慮

アンケートの実施に際して、NPO 法人森のようちえん全国ネットワーク連盟理事会に研究の趣旨やアンケート内容、個人情報の遵守などを説明し承認を得た。アンケートには、調査の目的・倫理的配慮を記して無記名とし、回答は統計的に処理され個人が特定されることはないことを明記した。また、前述のベネッセ

の保護者アンケートの結果を引用したが、引用にあたっては、ベネッセ教育研究所のHPに「研究・教育、その他の公的な目的の場合は、ご自由に引用・転載していただいて構いません。」との記載があり、出典記載例に則って出典を引用・参考文献に明記している。

3. 結果

3.1 非認知スキルの育ち

非認知スキル 15 項目を【好奇心】【協調性】【自己主張】【自己抑制】【がんばる力】に分類し、森のようちえんと既存園の年少から小2の変化を比較した結果が図1～図5である。保護者が「とてもあてはまる」を選択した割合を記載している。年少から小1の森のようちえんの数値は、これまで縦断調査をしてきた結果を記載している。

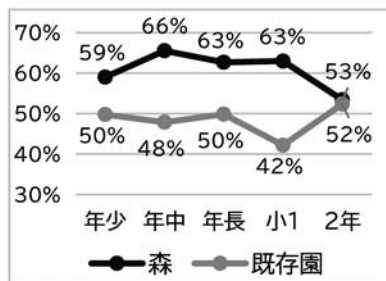


図1 好奇心

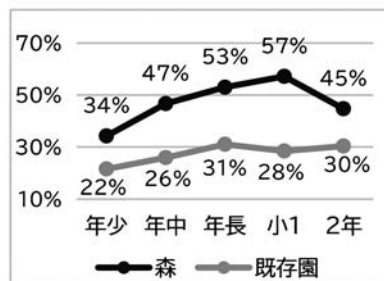


図2 協調性

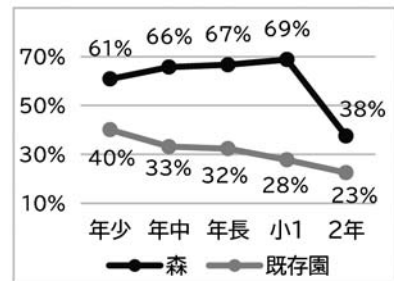


図3 自己主張

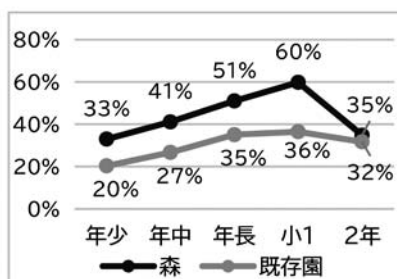


図4 自己抑制

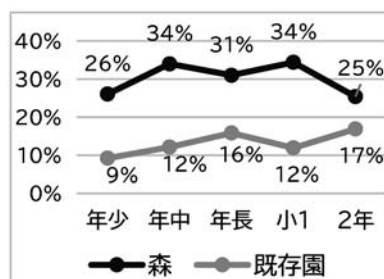


図5 がんばる力

非認知スキルは、すべての項目と学年で既存園よりも森のようちえんの方が身についており、特に【協調性】(森45%、既30%)、【自己主張】(森38%、既23%)については、15ポイント森のようちえんの方が高い結果であった。2年で一番身についている非認知スキルは【好奇心】53%、次いで【協調性】45%、【自己主張】38%であった。一方、森のようちえんは小2ですべての項目が減少しており、【自己主張】31ポイント、【自己抑制】25ポイント、【協調性】12ポイント、【好奇心】10ポイント、【がんばる力】9ポイントの減少が認められた。既存園は、小1で【自己抑制】以外のすべての項目が減少したが、森のようちえんは小2ですべての非認知スキルが減少しており、非認知スキルの減少が既存園より1年遅い結果であった。既存園は、小2で【好奇心】【協調性】【がんばる力】が上昇しており、【好奇心】(森53%、既52%)、【自己抑制】(森35%、既32%)は、森のようちえんと既存園がほぼ同程度の結果であった。

3.2 認知スキルの育ち

森のようちえんと既存園の2年での認知スキルの育ちを比較したグラフが図6である。保護者が「とてもあてはまる」を選択した割合を記載している。

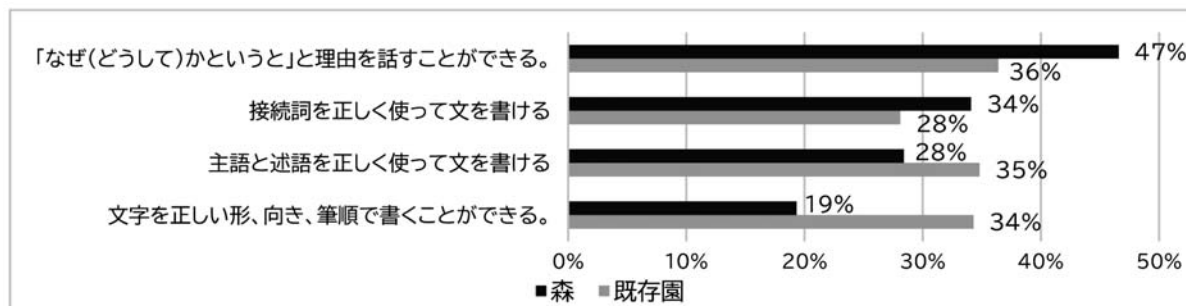


図6 認知スキルの育ち

認知スキルについては、『なぜ(どうして)かという』と理由を話すことができる(森47%、既存36%)といった、自身で考える項目は森のようちえんの方が高い結果であった。一方、「文字を正しい形、向き、筆順で書くことができる」「主語と述語を正しく使って文を書ける」といった決められたことを規定に合わせて完成させる項目については、森のようちえんの方が苦手な子どもが多いことが認められた。

3.3 家庭での学習態度・習慣の育ち

家庭での学習の様子について比較したグラフが図7である。保護者が「とてもあてはまる」「あてはまる」を選択した割合を記載している。

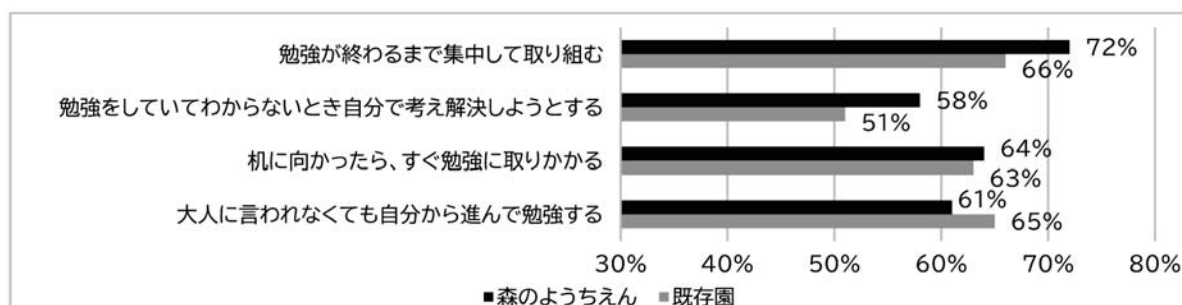


図7 学習態度・習慣

「勉強が終わるまで集中して取り組む」(森72%、既存66%)、「勉強をしていてわからないとき自分で考え解決しようとする」(森58%、既存51%)といった学びに向かう集中力や自己解決しようとする意欲が高い結果であった。一方、「大人に言われなくても自分から進んで勉強する」(森61%、既存65%)は既存園のほうが高かったが、「とてもあてはまる」を選択した割合は、森のようちえん25%、既存園21%であった。森のようちえんでは、主体的に学ぼうとする意欲が高い子どもと、言われてから受動的に勉強する子どもがいることが認められた。また、「学校の宿題をする時間(学校の中でする時間を除く)」は、既存園の1年から3年の平均が32分、森のようちえん2年は平均23分で、15分以内の子どもが33%と概ね3分の1であった。「学校の宿題以外の勉強をする時間(学習塾の時間を除く)」は、既存園の1年から3年の平均が15分、森のようちえん2年が9分で、「0分」の子どもが58%であり、半数以上の子どもが家庭では学校での勉強のみをおこなっている。

3.4 勉強・教科に対する自信

森のようちえんと既存園の「勉強の好き嫌い」を比較したグラフが図8、「国語への自信」のグラフが図9、「算数への自信」のグラフが図10である。

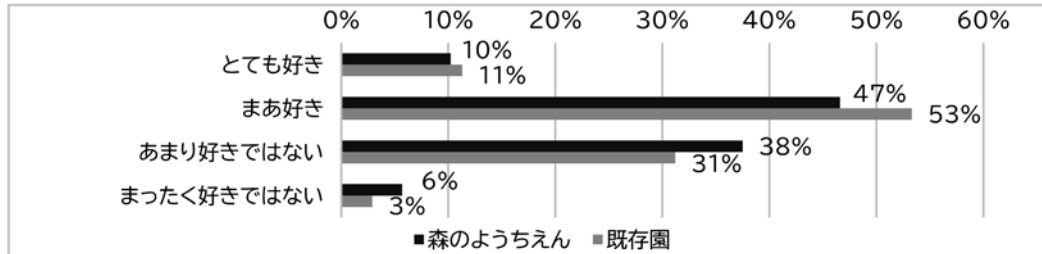


図8 勉強の好き嫌い

勉強の好き嫌いについては、「とても好き」が森のようちえん 10%、既存園 11%、「まあ好き」は森のようちえん 47%、既存園 53%と、森のようちえんは既存園よりも好きを選択した子どもが少ない。また、「あまり好きではない」「まったく好きではない」を選択した割合が、森のようちえんは 44%、既存園は 34%であり、森のようちえん卒園児は、2年生の段階で 44%の子どもが勉強をあまり好きではないという結果であった。

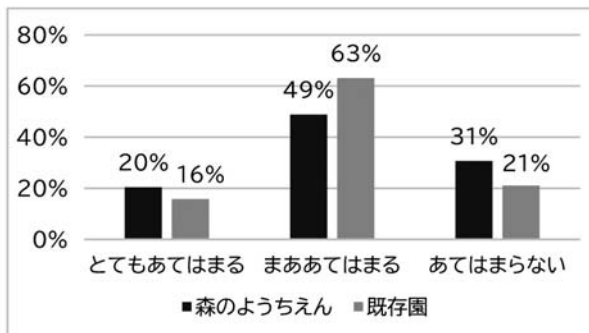


図9 国語への自信

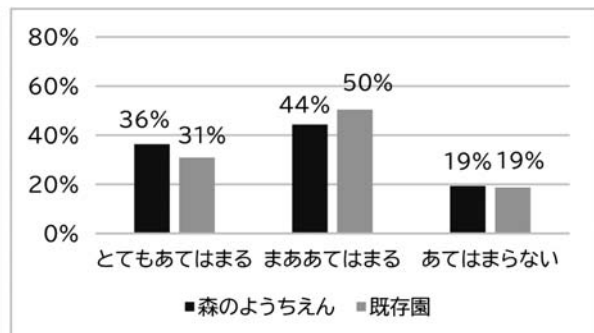


図10 算数への自信

科目の自信については、「国語」は、「とてもあてはまる」が森のようちえん 20%、既存園 16%であるが、「あてはまらない」が森のようちえん 31%、既存園 21%であり、国語は、得意と苦手な子どもに分かれている。「算数」は、「とてもあてはまる」が森のようちえん 36%、既存園 31%であるが、「あてはまらない」が森のようちえん、既存園ともに 19%であった。どちらの子どもも算数に自信がある子どもが多く、森のようちえんの方が、その傾向が強かった。

3.5 「非認知・認知スキル」と「在園時での園の体験」の相関

「非認知・認知スキル」18項目と森のようちえん在園時の「園での体験」との相関を検証し、6項目以上で有意な相関が認められた項目の spearman の相関係数と有意確率（両側）を一覧にしたものが表1である。

表1 「非認知・認知スキル」と「園での体験」の相関

			共同的な活動	遊びこむ経験			自然環境
			友だちのいいところや得意なことを知る	見通しをもって、遊びをやり遂げる	自由に好きな遊びをする	遊びに自分なりの工夫を加える	在園時に森にいた時間
		相関項目数	12	7	7	6	6
非認知スキル	好奇心	好きなことに集中して取り組む		.224*			.244*
		考えたり、調べたり、質問したりできる		.253*		.214*	.222*
		新しいことに好奇心を持てる	.287**				.227*
	協調性	気持ちを伝えたり、意見を聞いたりする	.279**				
		けんかしても、謝るなどして仲直り	.335**		.273*	.315**	
		友達と協力することができる	.210*				
	自己主張	意見が違っても自分の考えを主張する	.283**	.272*		.223*	
		イヤなことをされたら「いや」と言える		.267*			
		自分が何をしたいか言える	.261*	.280**	.296**	.333**	.274**
	自己抑制	人の話が終わるまで静かに聞く	.335**		.238*	.237*	
		人のいやがることは我慢できる	.244*		.223*		
		ルールを守りながら遊んだりする	.210*				
	がんばる力	工夫して達成しようとする	.275**	.238*		.340***	
		最後までやり通せる	.212*		.264*		
		ものごとをあきらめずに、挑戦する			.232*		
認知スキル	認知	主語と述語を正しく使って文を書ける					.290**
		「なぜかという」と理由を話す		.324**	.225*		.261*
		接続詞を正しく使って文を書ける	.290**				

** 1% 水準で有意（両側） * 5% 水準で有意（両側）

「園での経験」（【遊びこむ経験】6項目、【設定的な活動】4項目、【共同的な活動】4項目、【在園時に森（自然の中）にいた時間】1項目のうち、「非認知・認知スキル」の育ちと相関のあった経験1位は、【共同的な活動】の「友達のいいところや得意なことを知る」12項目、2位から4位は、【遊びこむ経験】の「見通しをもって遊びをやり遂げる」7項目、「自由に好きな遊びをする」7項目、「遊びに自分なりの工夫を加える」6項目であった。同じ4位に、「在園時に森（自然）の中にいた時間」6項目があり、幼児期の自然体験時間の長さが非認知スキルだけでなく、認知スキルに対してもポジティブに影響している結果であった。また、森のようちえんの経験を通して身につく非認知・認知スキルとして、この表に掲載していない項目も含めて、1位【自己主張】「自分が何をしたいか言える」、2位【好奇心】「考えたり、調べたり、質問したりできる」、3位【がんばる力】「一度始めたことは最後までやり通せる」、【自己主張】「意見が違っても自分の考えを主張する」、【自己抑制】「人の話が終わるまで静かに聞く」であった。【設定的な活動】の「小学校のように時間割に沿って活動をする」「全員で同じことに取り組む」「先生が決めた活動をする」「見本どおりに製作をする」では、「非認知スキル」「認知スキル」ともに育ちとの相関は認められなかった。

3.6 「学習態度・習慣」と「非認知・認知スキル」の相関

「学習態度・習慣」9項目と「非認知・認知スキル」の相関を検証し、「学習態度・習慣」6項目以上で相関が認められた「非認知・認知スキル」の spearman の相関係数と有意確率（両側）を一覧にしたものが表2である。相関係数が「.500」以上の項目を濃いグレーで、「.400」以上の項目を薄いグレーの網掛けで示している。

表2 「学習態度・習慣」と「非認知・認知スキル」の相関

		机に向かったら、すぐ勉強にかかると	勉強が終わるまで集中して取り組む	言われなくても自分から進んで勉強する	わからないとき自分で考え解決する	学校がある日、学校の宿題をする時間	宿題以外の勉強をする(塾除く)	「勉強」が好きか	国語に自信がある	算数に自信がある
非認知スキル	ものごとをあきらめずに、挑戦する	.290**	.282**	.467***	.457***	.321**			.232*	
	最後までやり通せる	.416***	.395***	.377***	.435***	.279**		.372***	.343***	.272*
	工夫して達成しようとする		.254*	.406***	.553***			.246*	.315**	
	人の話が終わるまで静かに聞く	.327**	.335***	.445***	.344***	.267*		.333**	.377***	
	人のいやがることは我慢できる	.344***	.284**	.387***	.263*	.329**	.211*	.395***	.377***	
	ルールを守りながら遊んだりする	.372***	.501***	.357***	.283**	.302**		.384***	.388***	.243*
	考えたり、調べたり、質問したりできる	.377***	.310**	.272*	.357***		.216*	.386***	.360***	.395***
	友達と協力することができる		.261*	.270*	.236*	.235*		.261*	.212*	.336***
認知スキル	文字を正しい形、向き、筆順で書く	.227*	.308**	.354***	.292**		.264*	.302**	.513***	.297**
	主語と述語を正しく使って文を書ける	.232*	.289**	.375***	.331**		.212*	.482***	.559***	.260*
	接続詞を正しく使って文を書ける	.381***	.413***	.438***	.471***			.521***	.556***	.360***

*** 相関係数は 0.1% 水準で有意 (両側) ** 1% 水準で有意 (両側) * 5% 水準で有意 (両側)

「学習態度・習慣 (9 項目)」と「非認知 (15 項目)・認知スキル (4 項目)」の相関を検証したところ、「学習態度・習慣」5 項目以上との相関が認められたスキルは、「非認知スキル」8 項目、「認知スキル」3 項目であった。その内訳は、「非認知スキル」の【がんばる力】3 項目、【自己抑制】3 項目、【好奇心】1 項目、【協調性】1 項目、「認知スキル」の 3 項目であった。「学習態度・習慣」の育ちには、「非認知スキル」の【がんばる力】【自己抑制】【認知スキル】の育ちが影響しており、特に【がんばる力】の「工夫して達成しようとする」「ものごとをあきらめずに挑戦する」「最後までやり通せる」や、【自己抑制】の「ルールを守りながら遊んだりする」「人の話が終わるまで静かに聞く」、「非認知スキル」の「接続詞を正しく使って文を書ける」といった項目との相関が強かった。

また、「勉強が好き」「国語・算数への自信」の育ちには、「認知スキル」の育ちが重要であるが、併せて【好奇心】【協調性】【自己主張】【自己抑制】【がんばる力】すべての非認知スキルの育ちとの相関が認められた。

3.7 「学習態度・習慣」と「保護者の関わり」の相関

森のようちえん卒園児の「学習態度・習慣」9 項目の育ちと「保護者の関わり」19 項目 (【意欲の尊重】6 項目、【思考の促し】2 項目、【学習習慣の形成】8 項目、【教科への興味の刺激】3 項目) の相関を検証し、3 項目以上で相関が認められた関わり *spearman* の相関係数と有意確率 (両側) を一覧にしたものが表 3 である。

表3 「学習態度」と「保護者の関わり」の相関一覧

			机に向かったら、すぐ勉強に取り組む	勉強が終わるまで集中して取り組む	言われなくても自分から進んで勉強する	わからないとき自分で考え解決する	学校がある日、学校の宿題をする時間	宿題以外の勉強をする(塾除く)	「勉強」が好きか	国語に自信がある	算数に自信がある
保護者の関わり	文字や数に興味を示したら環境を整える	学習習慣の形成	.258*		.245*	.215*		.248*	.274**		.243*
	子どもが勉強の計画を立てるのを手伝う		.302**			.258*	.218*				
	指図せずに自由にさせている	意思の尊重	.357***	.293**	.325**				.246*	.283**	
	子どもがやりたいことを尊重し支援する		.255*	.286**	.328**				.379***		
	社会のしくみや歴史のできごとの背景を伝える	教科への興味の刺激		.244*		.237*		.277**	.211*		.232*
	算数の考え方や解き方のおもしろさを伝える						.225*		.227*		.213*
	「どうして、なぜだろう」の質問に答える	思考の促し	.211*			.246*			.234*	.221*	

** 1% 水準で有意 (両側) * 5% 水準で有意 (両側)

「学習態度・習慣」と3項目以上、正の相関が認められた「保護者の関わり」は7項目であった。そのうち【学習習慣の形成】が2項目、【意思の尊重】が2項目、【教科への興味の刺激】が2項目、【思考の促し】が1項目であった。「学習態度・習慣」を育む要因として、保護者の【学習習慣の形成】「文字や数に興味を示したら環境を整える」、【意思の尊重】「指図せずに自由にさせている」、【教科への興味の刺激】「社会のしくみや歴史のできごとの背景を伝える」などの関わりが重要であることが示唆された。

森のようちえんの保護者は、既存園と比較し、【教科への興味の刺激】は(森 74%、既存 61%)、【学習習慣の形成】は(森 52%、既存 65%)と、教科への興味の刺激が多く、学習習慣の形成が少ない結果であった。以下の図11は、既存園との差が大きかった保護者の関わり項目を示したものであるが、上の2項目が【教科への興味の刺激】、下4項目が【学習習慣の形成】であり、教科への興味は伝えているが、日常の宿題の確認や学習習慣、環境を整えるなどの援助が少ない特徴が認められた。

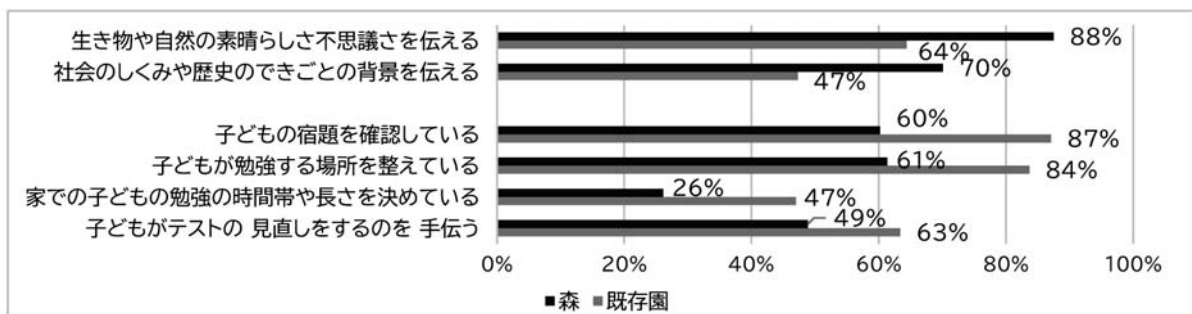


図11 学びに対する保護者の関わり

4. 考察

4.1 「非認知・認知スキル」の育ちとそれを育む要因

非認知スキルは、年少から小2 まですべての学年、項目で森のようちえんの方が高い結果であった。自然体験活動を基軸にし、豊かな感性を育み、子どもの力を信じ、子ども自身で考え、心と体のバランスのとれた発達を促す森のようちえんで、【共同的な活動】の「友達のいいところや得意なことを知る」経験や、【遊びこむ体験】の「見通しを持って遊びをやり遂げる」「自由に好きな遊びをする」「遊びに自分なりの工夫を加える」経験をすることが、非認知スキルを育む要因であることが示唆された。既存園では、小1 で「自己抑制」以外のすべての非認知スキルの項目が減少したが、森のようちえんは小2 で減少しており、非認知スキルの減少時期が、森のようちえんは1 年遅い結果であった。

認知スキルの『なぜかという』と理由を話せる」といった自身で考える項目は森のようちえんの方が身につけているが、決められたことを規定に合わせて正しく書くといった項目については、既存園より苦手な子どもが多く、森のようちえんの子どもは、昨年度の調査と同様に、指示されること、決められたことをする弱さが認められた。また、在園時に【森にいた時間の長さ】は、非認知スキルだけでなく認知スキルの育ちの要因でもあることが示唆された。

4.2 「学習態度・習慣」「勉強・教科に対する自信」の育ちとそれを育む要因

「勉強が終わるまで集中して取り組む」「勉強していてわからないとき自分で考え解決しようとする」といった学びに対する集中力や自己解決しようとする意欲は、森のようちえんの方が高い結果であった。一方、「大人に言われなくても自分から進んで勉強する」の主体的に学ぶ項目は、既存園のほうが高かったが、「とてもあてはまる」のみを選択した割合は、森のようちえんの方が高かった。森のようちえん卒園児は、主体的に学ぶようとする意欲が高い子どもと、言われてから受動的に勉強する子どもの両方いることが認められた。

「勉強の好き嫌い」については、既存園の方が勉強を好きな子どもが多く、森のようちえん卒園児は、2 年生で44%（既存園34%）の子どもが勉強をあまり好きではないという結果であった。「勉強が好き」である要因として、【好奇心】【協調性】【自己主張】【自己抑制】【がんばる力】すべての非認知スキルと認知スキルとの相関が認められ、勉強への興味や自信が育つためには、認知スキルだけでなく、非認知スキルも十分に育てることが重要であるといえる。また、保護者の関わりとしては、【学習習慣の形成】と【意思の尊重】が「学習態度・習慣」の育ちに繋がっているが、森のようちえんの保護者は【学習習慣の形成】の関わりが低い傾向が認められた。

「科目の自信」については、「国語」「算数」共に、「とてもあてはまる」を選択した割合が森のようちえんの方が高かったが、「国語」については森のようちえんの方が苦手な割合も高かった。「算数」は国語より自信があり、既存園よりもその傾向が強かった。

「学習態度・習慣」の育ちの要因として、「非認知スキル」では、特に「一度始めたことは最後までやり通せる」「工夫して達成しようとする」「ものごとをあきらめずに挑戦できる」といった【がんばる力】と、「ルールを守りながら遊んだりする」「人の話が終わるまで静かに聞く」といった【自己抑制】を育むことが学習態度・習慣の育ちの要因となっている。また、「接続詞を使って正しく文を書ける」「主語と述語を正しく使って文を書ける」といった「認知スキル」は、「学習態度・習慣」だけでなく「勉強・教科に対する自信」の育ちの重要な要因にもなっている。筆者が2025 年におこなった森のようちえん卒園児が小1 での研究では、「学習態度」の育ちには「認知スキル」よりも「非認知スキル」の育ちが重要な要因になっている

結果であったが、2年になると、「認知スキル」が身につけていることが、「学習態度・習慣」「勉強・教科に対する自信」の育ちに繋がっている。

また「保護者の援助」では、「文字や数に興味を示したら環境を整える」【学習習慣の形成】や「指図せず自由にさせている」「子どもがやりたいことを尊重し支援する」といった【意思の尊重】、「社会のしくみや歴史のできごとの背景を伝える」【教科への興味の刺激】を行うことが、「学習態度・習慣」の育ちや「勉強が好き」である要因になっている。

4.3 森のようちえん卒園児の育ちの相関図

森のようちえん卒園児の「園での経験」「非認知スキル」「認知スキル」「学習態度・習慣」「勉強・教科に対する自信」「保護者の援助」の相関を図示したものが図12である。「非認知スキル」「認知スキル」「学習態度・習慣」「勉強・教科に対する自信」を育むための要因となる項目との相関の強さを矢印の濃さと太さで示している。

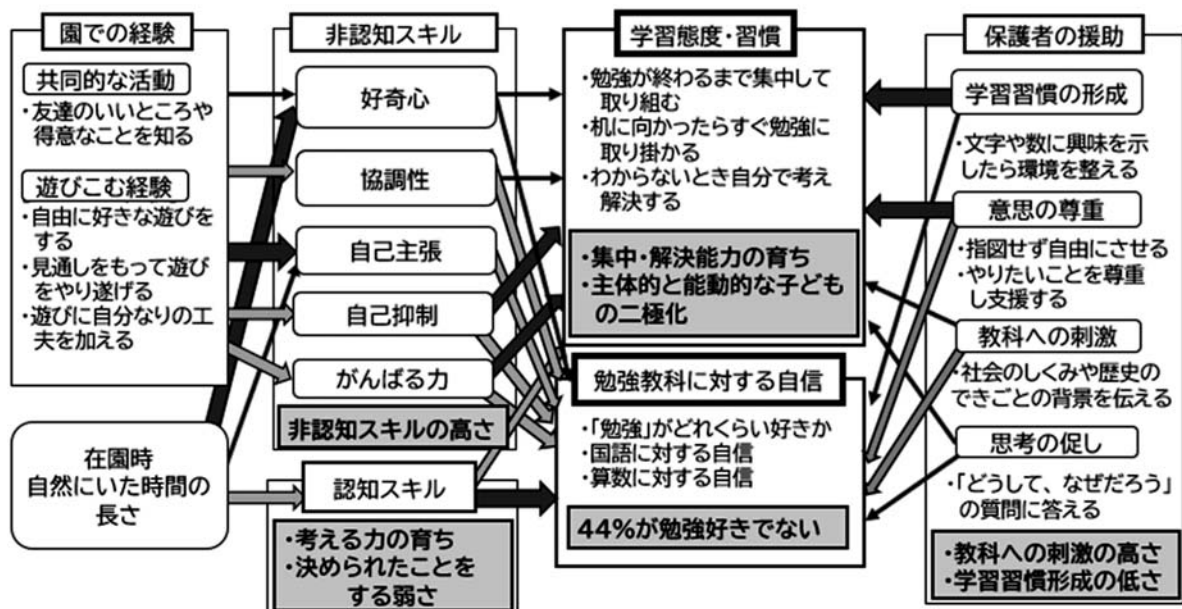


図12 森のようちえん卒園児の育ちの相関図

森のようちえんでの【共同的な活動】「友達のいいところや得意なことを知る」や【遊びこむ経験】「自由に好きな遊びをする」「見通しをもって遊びをやり遂げる」、「遊びに自分なりの工夫を加える」といった経験が「非認知スキル」の【自己主張】【協調性】【自己抑制】【がんばる力】を育み、【在園時、自然の中にいた時間】が「非認知スキル」の【好奇心】、「認知スキル」を育てている。そして、「学習態度・習慣」の育ちの要因は、「非認知スキル」の【自己抑制】と【がんばる力】であり、「勉強・教科に対する自信」の育ちの要因は、【好奇心】【自己主張】【協調性】【自己抑制】【がんばる力】といったすべての「非認知スキル」と「認知スキル」であった。また「保護者の援助」については、「学習態度・習慣」の育ちには【学習習慣の形成】や【意思の尊重】、「勉強・教科に対する自信」の育ちには、【意思の尊重】や【教科への刺激】が要因となっている。

4.4 森のようちえん卒園児の育ちの特徴と課題

森のようちえん卒園児の育ちとして、「非認知スキル」はすべての項目で既存園よりも育っている。「認知スキル」については、「考える力」が育っていること、「決められたことをする弱さ」が挙げられる。「学習態度・習慣」の育ちについては、「集中力」や「問題解決能力の育ち」が認められたが、「主体的と能動的な子どもの二極化」が示唆された。また、44%の子どもが「勉強が好きではない」ことは課題である。その要因として、「認知スキル」の【決められたことをする弱さ】が一因であると推測される。また、森のようちえんの保護者は「学習態度・習慣」の育ちの要因である「宿題を確認する」「勉強する場所を整える」「家庭での勉強の時間帯や長さを決める」「テストの見直しをするのを手伝う」といった【学習習慣の形成】が低い結果であった。小学校低学年では、保護者の援助を必要としている子どもも多く、【意思の尊重】に加え、【学習習慣の形成】の援助をする必要性を保護者に伝えることも重要であるといえる。

4.5 今後の研究

これまでの調査では、森のようちえんの年少から小学2年まで、すべての非認知スキルの項目で既存園より高い結果であったが、今後もそれは継続されるのか、「勉強が好きではない子ども」が次年度以降どのように変化するかなどについて引き続き縦断調査を行い、自然体験を重視した森のようちえん卒園児の長期的な育ちについて、就学後の子どもの学びに向かう力の育ちの特性とその要因について検証していきたい。

【謝辞】

本研究を行うに当たり、アンケートに快くご協力いただきました全国の森のようちえんの保育者、保護者の皆さまに心より御礼申し上げます。また、アンケートを協同で作成していただいた森のようちえんさん ぼみち NPO 法人ネイチャーマジック理事長 野澤俊索様に、心より感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- ・ベネッセ：幼児期から小学4年生の家庭教育調査・縦断調査 最終閲覧 2026.5.
https://berd.benesse.jp/up_images/publicity/pressrelease_20190225_.pdf, 2019,
- ・ベネッセ：園での経験と幼児の成長に関する調査 最終閲覧 2026.5.
<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4940>, 2016.
- ・ヘフナー・ペーター著、佐藤 竺訳：『ドイツの自然・森の幼稚園ー就学前教育における正規の幼稚園の代替物』公人社，2009.
- ・小嶋 治鈴・松本 信吾・久原 有貴・関口 道彦・中邑 恵子・上田 毅・清水 寿代・杉村 伸一郎：森の幼稚園の保育環境が小学校以降の体力・運動能力および学力に及ぼす影響：小学校での新体力テスト・標準学力検査を用いた長期的な影響の検討，学部・附属学校共同研究紀要（45）1-7, 2017.
- ・大谷彰子：森のようちえん卒園児の学びに向かう力の育ちと要因ー学習態度，学習習慣に着目してー，芦屋大学論叢 84 号，pp.31-41, 2025.
- ・酒井真由子・西朋子・山口美和：幼児期における外遊びの経験が学童期の活動性に及ぼす影響，上田女子短期大学紀要 44，pp.43-56, 2021.
- ・下村一彦・宮崎温・渡邊堯宏・請川滋大・滝澤真毅：大学生世代となった‘こどもの森幼稚園’（森のようちえん）卒園児の非認知的特質の傾向，東北文教大学紀要 15 号，pp.1-14, 2025.

- ・特定非営利活動法人 森のようちえん全国ネットワーク連盟 HP 最終閲覧 2026.5.
<https://morinoyouchien.org/map>
- ・山口三和・酒井真由子・木戸啓絵・大道香織：幼児期の経験がレジリエンスと自尊感情に及ぼす影響－「森のようちえん」の卒園児に注目して－，上越教育大学研究紀要第 40 巻，pp.495-506，2021.